

報告二

▲集落的なるものVをめぐって

東北大学 佐藤 勉

私はいままで一〇ヶ所余の村を調査してきたが、その際、共同体論とかコミュニティー論とかいった概念を用いて研究したことはなかった。それは、私の本来のテーマが、パーソンズやルーマンを読むことであり、その理論を直ちに日本の村に適用してみても、充分把握しきれぬものではなかった。また、たとえば共同体の解体とか、家の実在といっても、現実の今の農村を理解することにならなかつた。そこで、共同体とかコミュニティーという概念を使わずに、現

在の村をとらえるために、数多くの村を歩いた。かつて村をとらえるパラダイムの転換を考えたが、いまはいわばパラダイム不在という点から、まず村の現実をみようとしている。

ここで見えてきたものは、多様なやり方で生活拠点を作っている農民の努力する姿である。どの村に行ってみても、そこに生活世界があり、多少の農業を基軸に、兼業・副業と多様な行動様式をもちながら生活を続けているのが農家であった。共同体は解体したというが、それらの農家に集落的なものが必要なくなつてはいない。明治的・戦前的パラダイムがなくなったとしても、いまあるものが明確にされていない。

そこで幾つかの村の調査で感じたものを一般化し、いわば等身大の経験的な理解を通して、「集落的なるもの」の背景にある社会関係、社会的なるものを考えてみたい。つまり、現在に生きる農民像を通じて、集落的なるものの意味を考え、予め設定した本質概念を用いずに村をみていきたいと思う。

二

集落という概念は、一つは景観であろう。しかし地理学の方でもいまは景観だけでは集落をとらえていない。その背景に社会関係の存在をみている。現在の集落をみて第一に考えられるのは、人々の「定住」の地域という点である。人々が生き続けるための地域である。

愛知県安城市高棚町の事例をみよう。

高棚町は旧村で、現在戸数八五〇、うち農家三〇〇余、現在は「高棚町内会」という組織をもつ。この高棚は、二つの行政区に分

かれており、高棚地区（本郷）と新池地区と呼ばれている。新池の戸数は一五〇、うち農家は八〇足らず、本郷より遙かに小さい。しかし農協支所もあり、神社もあって、通常ならこれが一つの集落と考えられる。空間的にもかなり離れている。

しかし、実際は、高棚本郷と新池は同一町内会で一体性が強い。新池の人は新池の神社にも寄付を出すと同時に、本郷の神社にも出している。日常関係では、新池は本郷から蔑視され勝ちで、通婚も少ない。それがなぜ一つの集落として行動するのが問題である。

高棚町内会の大きな任務は、市あるいは県から、行政的あるいは財政的にさまざまな利益を獲得することである。それは構造改善事業や営農組合のことにも及ぶ。それを獲得する力は、新池単独ではないと考えられている。蔑視されても本郷についていることが有利になる。両地区の農業をみれば、営農組合の中でも新池の農家の方が中心であり、専門的なものがより多く全面委託農家も少ない。本郷の方はより兼業化しており全面委託も多い。しかし、補助金・融資の獲得は高棚町内会の範囲で一本になって行われるのである。

これは、新池を一つの生活世界、定住地域として支えるためには、高棚一本でないとやっていけないことを示す。それは、反面からいえば、国・行政の施策の受皿としての単位でもある。

集落としての結合は、このように外部に対して、人々の生存・定住条件を獲得するための受皿となるばかりでなく、内部に対しても、条件整備・秩序維持のために必要となる。高棚町の全面委託農家を見ると、町の何らかの役職についている者が多い。そしてその地位にあるがゆえに、「高棚町のために」営農集団の計画に従って、農地を委託に出しているのである。ここでは集落的なるものが、名誉

と引きかえに集落に寄与することを強制しているようにみえる。集落的なものが条件整備に利用されている。

集落間の問題では、安城市安城農協は二四の営農集団Ⅱ集落に分かれていたが、農地の受委託、流動化は当該営農組合Ⅱ集落の内部で行ない、他集落の農地は借りないものとされている。これは旧来の村落的土地管理というよりは、新しい定住条件としての集落単位の集団的農地利用といえよう

三

宮城県鹿島台町の山船越は、全面協業の営農組合ができたことで有名であるが、この営農組合ができたため、参加農家と非参加農家の二派に割れている。しかし、集落としては依然として統一された秩序を有している。つまり、営農の面では基本的に対立しながら、集落としての一体性は継続している。これは集落が農業秩序のための地域というよりは、生活を基礎とする社会的心理的空間の性格をもって示す。現在の兼業化・混住化のなかで、農業秩序の原理よりも、生活のための社会的コントロールの場という性格が強い。その例は、集落内では、他人のこともでも、あやまちはその場できびしく叱るということにみられる。

同じく宮城県角田市の古豊室は、朝日農業賞を受けた一五戸の小集落であるが、この集落は、農業も加工副業も兼業も、全員が一体となって調整して生活している。農業面では機械共同利用組合があり、梅干し加工の生産組合もあるが、実態はこれらが一体となり、しかも各戸の兼業状況も考慮しつつ、集落的な分担がなされている。また、集落として「みやぎ生協」との提携も進み、あらゆる試みを

して、生活条件を確保している。それはお互いが目・耳・匂いでたしかめ合えるというほど知り合って、集落が生活世界というべき一体性を作っているところである。

以上のように、現在の集落は、新しい生活空間として定住条件を獲得する場であるが、これらの集落を類型化できないものであろうか。それを行うためには、集落のなかにある各家族、各家の実情をみなければならぬ。

四

現在の農村は、農村とはいいながら、兼業、混住化が進み、農家だけとはいえない。そのなかで農家は、個々の家では対応しきれず集団的に、集落として資本主義経済に対応している。長野県の山村（ex川上村）などのように三〇アール経営でも中層以上という村で農家はどのようにして生活し得るのか、という問題がある。

こうした農家Ⅱ家は、農業は生活手段のごく一部にすぎない。ありとあらゆることをやって所得を得て生活している。つまり農家といっても農業を理念型として持つようなものではない。農業もその一部であるような生活構造を考え、これを類型化してみることが必要である。農用地を基礎的な資産として、定住志向をもつことが農家なのであり、それを誰かが何時かは継ぐという目標をもっている。その実現のために、兼業でもなんでもあらゆる方法で生活しているのが農家である。

これは、典型として農家らしい農家を措定する従来の考え方とは異なるものである。専兼的という農家分類でなく、もっと全生活構造的な基準を必要とする。

こうした場合、村あるいは集落というものも、構造的な概念ではとらえられないであろう。いうならば、多種多様な生活様式の実現のために集落が必要になっている。そしては運動のための村、あるいはそのための組織としての村となっている。構造改善の成功事例も計画通りに成功したものは少なく、試行錯誤の努力を重ねてたまたま成功したともいえるものが多い。その努力の社会的関連が村としての運動となって現われている。

集落のリーダーもまたそうである。リーダーは育成できるものではない。リーダーとなった人は、集団の試行錯誤の努力のなかから生み出される。いわば不確実な状況で、ルーティン化してやれない時に、そのなかで方向を探り出し、治まりをつけた人がリーダーといわれる。そのリーダーのサクセス・ストーリーでなく、その人が認識していた集落像を明らかにし、努力の軌跡のなかで集落をどう観察していたかが問題である。リーダーがそこから何を発見し発掘したか、そうした動態のなかに、現代の集落の意味があると思う。計画がそのままでは実現できず、予想不能なところでさまざまに頑張っているのが、現実の集落の動きである。共同体解体後の村の実在性をその点からみていきたい。

（要約文責 山内 太）